

「気になる子ども」への保育に対する保育士の困難さに関する研究

岡本 美幸・安田 純

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第63号抜刷）

論 文

「気になる子ども」への保育に対する保育士の困難さに関する研究

A Study on Nursery Teachers' Difficulties of Caring for "Children of Concern"

岡本 美幸^{1)†}・安田 純²⁾

要 旨

本研究では、「気になる子ども」の保育または支援にあたっている保育士の困難さや、専門性の向上に向けた研修の現状を把握し、「気になる子ども」を保育する保育士への有効な支援方策について検討した。保育士は、研修への参加が十分でなく、日々模索しながら保育を行っており、保育上の困難さを抱えていた。そのため、十分な心のゆとりが持てず、子どもへの丁寧なかかわりが行えない現状もあった。保育士が、いつでも気軽に相談できるような有効な取り組み方を検討し、保育士が保育実践力や保育有能感の向上を行えるような研修を実施することや、その研修を利用しやすい制度や環境の整備、専門機関とのさらなる連携が重要である。

キーワード：保育 専門性 向上 気になる子ども 発達障害 質問紙調査 保育士支援

はじめに

近年、保育所は社会的な保育ニーズの高まりに応じ、様々な役割を担うために、機能を拡大している。そして保育士には、これまでに蓄積した専門性だけで保育を行っていくことに困難を生じる程、様々な課題が生じている。その一つに、「気になる子ども」への保育や支援に関する課題がある。

「気になる子ども」とは、何らかの障害があるとは認定されていないが、知的側面には著明な遅れは認めないものの行動や発達に特徴のある子ども（本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島, 2003）や、発達障害を疑う子ども（無藤・柘植・神長・河村, 2005）、さらに、家庭環境や生活環境により情緒や行動の発達に支障をきたしたりしている子ども（池田・郷間・川崎・山崎・武藤・尾川・永井・牛尾, 2007）まで含まれている。そういった子どもに、保育士は、その対応が適正であるのか確

証を持ってないまま日々の保育を臨床的に行い、一人一人に合った対応の仕方を模索していると考えられる。

「気になる子ども」については、明確な定義はないが、本研究では、先行研究をふまえた上で、「気になる子ども」とは、明確な診断名がないものの、保育者が日々の保育の中で特別な配慮の必要性を感じたり、日常の保育を行う上でどのように対応すべきか悩んだりするなど、保育上の困難さがあると感じる子どもとする。

「気になる子ども」は、近年では更に増えつつあると保育現場では認識されている（嘉数・財部・土地・石橋, 2007; 竹田・里見・西岡・秋元, 2013）。その子どもの中には、後に発達障害と認定される子どもも存在する。その子どもは、保護者よりも先に、保育所や幼稚園での集団保育において、保育者によって発見されることが多かったり、担任による細かな配慮だけでなく、職員間で連携したり、事例検討会（ケース会議）を行い子どもの情報や対応を園全体で共有したりしな

^{1)†} 美作大学短期大学部幼児教育学科

²⁾ 美作大学生生活科学部児童学科

から保育が行われている状況にある。時には、専門家による研修の開催や、定期的な巡回相談などで専門機関との連携などが行われているが、その支援には地域や園により差があるという（園山・由岐中, 2000）。

また、保育士は、さまざまな子どもの個人差に考慮しながら保育を展開するために、更なる資質向上が必要とされている。2018年度より改訂施行される保育所保育指針でも、これまで同様に、保育所内外の研修等を通じて、障害や発達に関する専門的な知見を、研修や実践研修によって高め、質の高い保育実践を行うように示されている（厚生労働省, 2017）。それゆえに、「気になる子ども」を支援する保育士への支援は重要である。

そこで本研究では、「気になる子ども」が保育所で安定して過ごせるために、「気になる子ども」の保育または支援を行う保育士への有効な支援方法を検討するにあたり、保育士を対象に質問紙調査を実施した。そして、それを通して保育士の、「気になる子ども」の保育または支援の困難さや専門性の向上の意識を、自由記述の分析を中心として、A市内の保育士の現状と課題について明らかにすることを目的とする。

調査方法

本研究の調査協力者は、岡山県A市内の全保育所28園の全保育士資格所有者（担任外保育士であるパート保育士や短時間保育士を含む）であった。

全園に筆者が直接訪問し、本研究の調査の目的を口頭および文章で説明し、調査内容に園長の同意が得られた後に、園側の指定する必要部数分の質問紙への回答を依頼した。

質問紙調査の回答は無記名により行われ、個人の特定が困難な状態のデータを収集した。調査協力者には、本調査の結果は、個人名ならびに個人のプライバシーに関する事柄が特定される情報として公表することは一切ないこと、答えたくない設問については回答しなくてよいことを明記し、回答は調査協力者の自由意思によるものとした。回収は、返信用封筒または直接訪問により行われた。

研究の調査期間は、2015年2月から4月までの間であり、そのうち2月から3月に質問紙の配布を行い、3月から4月にかけて回収を行った。この時期に、質問紙の配布、回収を実施したのは、当該年度の保育内容についての質問に対する回答を得るためである。

質問紙は、フェイスシート、「気になる子ども」の存在や、保育士の困難さ、他機関との連携、専門性向上に向けた研修への参加状況など、38項目であった。なお、質問紙においても、先述同様に、「気になる子ども」とは、明確な診断名がないものの、保育者が日々の保育の中で特別な配慮の必要性を感じたり、日常の保育を行う上でどのように対応すべきか悩んだりするなど、保育上の困難さがあると感じる子どもであることを、文章にて説明を行った。質問紙を作成するにあたり、質問紙全体の内容は、本郷ら（2003）や丸山（2008）の調査を参考にした。そのうち、①園内で開催されている「気になる子ども」に関する研修への参加状況や研修の在り方について感じていること、②園外で開催されている「気になる子ども」に関する研修への参加状況や研修の在り方について感じていること、③「気になる子ども」の保育または支援のために、自身に必要だと感じていることの3項目は自由記述形式で行った。本研究においては、この項目について検討を行う。

結果

アンケート回収率は、質問紙を492部配布し、323部回収（回収率65.7%）した。回答者の内訳は、男性3名、女性319名、無記入者1名であった。

（1）「気になる子ども」の保育の現状

「気になる子ども」の保育または支援の状況について、96.2%の保育士が園内に「気になる子ども」が「いる」と回答した。そして、「気になる子ども」の保育に不安を感じる保育士は、90.4%と割合が高かった。A市内のほとんどの保育所の各クラスに、保育士が「気になる子ども」と感じる子どもが在籍し、不安を感じながら保育または支援がなされているようであった。

(2) 園内で開催されている「気になる子ども」に関する研修について

園内で開催されている「気になる子ども」に関する研修への参加状況や研修の在り方について感じていることを自由記述で回答を求めたところ、56名(回答率17.3%)の記入があった。それを、KJ法を用いて、文章を単語・文節に区切り、80枚のカードに分類した。56名の単語・文節は、平均1.4(範囲1-3)であった。園内で開催されている「気になる子ども」に関する研修への参加状況や研修の在り方については、園内での研修が定期的に開催されていたり、職員間で共通理解ができていたりし、充実している内容のものは少なく(17.5%)、充実していない内容が多かった(80.0%)(図1,表1)。

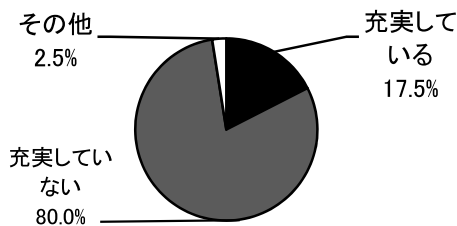


図1 園内支援研修の現状 (N=80)

更に、充実していないに分類された回答の内容は、①開催回数・内容の問題を感じているものと、②保育や支援体制の問題を感じているもの、③参加者に関する問題を感じているもの、④支援に関する外部との連携に関するものの四つに細分類された。

園内で開催されている「気になる子ども」の支援に関する研修については、開催回数と支援体制の問題が最も多く指摘されていた。その次に、「気になる子ども」の保育または支援の体制が不十分な現状や、研修に参加する保育士に制限されていたり、研修内容の情報共有が十分でなかったりするなど、園内で開催されている「気になる子ども」に関する研修は、有効になされていないのが、現状であった。

表1 園内で開催されている支援研修の現状

カテゴリー	サブカテゴリー(N=80)
充実している (N=14)	共通理解ができている(10) 定期的に開催されている(3) 参加している(1)
	① 開催回数・内容の問題 (N=36)
充実していない (N=64)	共通理解がしたい(13) 研修時間が取れない(6) 知識・技術を習得したい(6) 研修回数が少ない(5) 行っていない(5) 内容を充実してほしい(1)
	② 保育・支援体制の問題 (N=11)
	ケース会議(事例検討会)も不十分(3) 担任任せ(3) 職員間の連携が不十分(1) 手探りで保育・支援(1) 担当になると不安(1) 「気になる子ども」の支援体制がない(1) 保育士不足により不参加(1)
	③ 参加者の問題 (N=10)
その他(N=2)	他の職員が参加し、自分は参加していない(4) 職員全体での研修をしたい(3) 一部の職員で話し合われている(1) 参加者から報告をうける(1) 参加者から報告がない(1)
	④ 外部機関との連携 (N=7)
	外部講師から具体的な指導を受けられる研修が必要(6) 研修はないが、保健師と連携をしている(1) 園外研修があるので十分(1)
	特に問題なし(1)

(3) 園外で開催されている「気になる子ども」に関する研修について

園外で開催されている支援に関する研修への参加について、図2で示す。「参加できている」と回答した割合は約2割と低く、約6割の保育士は、園外で開催されている「気になる子ども」に関する研修に参加していないようであった。

園外で開催されている研修は、担当歳児に関する研修や、保育実技に関する研修などの支援研修以外の研修への参加と比較しても、「気になる子ども」の保育

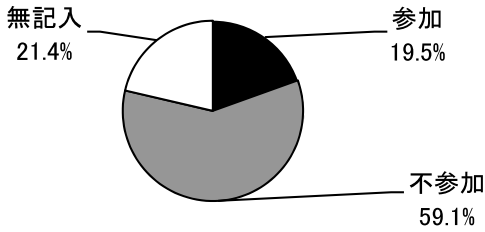


図2. 園外での支援研修への参加現状について (N=323)

または支援に関する研修の参加割合は低かった。

園外で開催されている「気になる子ども」に関する研修への参加状況や研修の在り方について感じていることの自由記述は、40名(回答率12.4%)が記述していた。それを、KJ法を用いて、文章を単語・文節に区切り、55枚のカードに分類した。

その内訳は、園外で開催されている「気になる子ども」に関する研修に期待していたり、望んでいたり理想を抱いていたりする内容が52.7%を占め、園外支援研修の現状や課題に関する内容は41.8%を占めていた(図3)。

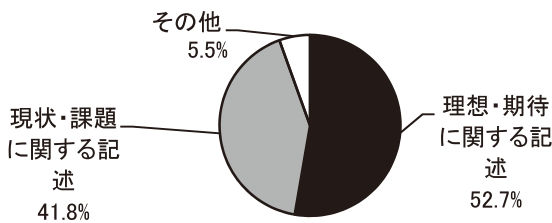


図3. 園外支援研修について感じていること (N=55)

園外研修への期待に関する内容の中には、「気になる子ども」の保育または支援に関する知識や技術の向上に有効であり、また、専門家からの教授だけでなく参加者との交流も有効であると捉えていた。

園外研修参加に関する内容や研修の実践問題に関する内容については、参加したいが園から参加する人数に制限があったり、多忙や都合が合わずに参加できなかったりする時間や回数の問題や、参加しても研修内容が難しかったり、実践につながりにくいなどの研修内容の問題もみられた(表2)。

表2 園外で開催されている支援研修の現状

カテゴリ	内訳 (N=55)
理想・期待 園外研修への期待 (N=29)	即実践できる内容に期待(15)
	知識・技術の向上に有効である(7)
	参加者との交流は有効(5) 臨床心理士を招いた研修(1) 参加して職員間で研修内容を共有(1)
現状・課題 園外研修参加の問題 (N=19)	参加したいができてこない(7) 研修開催回数を増やしてほしい(3)
	園で参加者が制限される(3) 多忙・時間がない(2)
	近隣で多く開催してほしい(2) 保育士不足で参加困難(1) 複数名参加したい(1)
	研修内容の実践問題(N=4)
	専門用語での研修は困難(2) 園外の研修の共通理解困難(1) 研修内容を即実行できない(1)
その他 (N=3)	支援よりほかの研修を優先(1) 特になし(2)

以上のように、園外で開催されている「気になる子ども」の保育または支援に関する研修への参加状況は十分ではないが、保育士の園外研修への期待は高かった。

(4) 「気になる子ども」の保育または支援において、自身に必要なと感じていること

「気になる子ども」の保育または支援において、自身に必要なと感じていることについて、171名(回答率51.5%)の記述があった。KJ法を用いて、文章を単語・文節に区切り、529枚のカードに分類し、それを、①技術・知識(N=255)、②知識(N=74)、③保育者の意識(N=118)、④職員の協働(N=19)、⑤その他(N=63)の、五つのカテゴリーに分類、集計した。五つのカテゴリーの占める割合を図4に示す。

「気になる子ども」の保育または支援や、その保護者に対応したり支援したりするために、自身に必要なこととして挙げられた、技術(48.2%)や知識(14.2%)の習得の内容について、子どもに関することでは、対応や関わり方、話し方など、直接かかわるための技術や子どもを理解するための専門知識は必要であると捉

えており、保護者に関することでは、気になる面の伝え方や、保護者とのコミュニケーション能力やそのための信頼関係を構築する力などが必要であると捉えているようであった。

また、技術や知識だけでなく、保育士の意識も重要と捉えており、習得に向けた意識や、「気になる子ども」のありのままの姿を受容すること、子どもとの関係性を深めることに努める意識も必要であると感じているようであった。

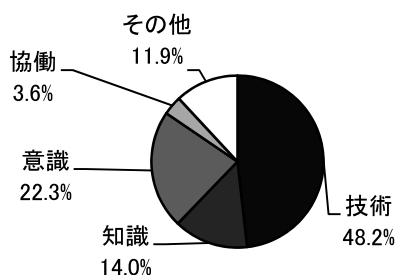


図4. 「気になる子ども」の保育・支援で自身に必要なこと (N=529)

「気になる子ども」の保育または支援で自身に必要なことを分類した529の分類を表3に示す。

「その他」のカテゴリーの分類の「その子」には、「その子」や「一人ひとり」、「個別に」など、一人ひとりに合った対応を意識した語彙が多く挙げられていた。

また、「その他」のカテゴリーの中には他に、知識や経験など「不足」としているという記述や、「もっと」「～ねばならない」のように「気になる子ども」のために強調した表現もみられた。

考 察

保育士は、「気になる子ども」の保育または支援において、困難さを抱えながら保育を行っており、その子どもに有効な保育や支援を模索しながら保育を行っている。そして、「気になる子ども」のために、その対策の一つとして、専門知識や技術の向上や知識の習得に向けて自己研鑽を行うことが必要であると捉えていた。園内で行う支援研修は、職員間で支援方法を共通理解したり、実際の子どもに合った対応の仕方を学

表3. 「気になる子ども」の保育で自身に必要なこと

カテゴリー	内 訳 (N=529)
子ども支援 (N=157)	対応・関わり・接し方(76) 支援技術(56) 話し方・伝え方(14) 環境(人的・物的)の工夫(6) 視覚支援(2) 記録する力(3)
	気になる面の伝え方(6) 支援(3) 対応の仕方(3) 日常会話(3) 信頼関係(3) 保護者の困難さの理解(2) 聞く力(1) 保護者を受容(1) 連携(1)
技術 (N=555)	子ども理解 (N=75)
知識 (N=74)	困難さ・本質(39) 性格(8) 行動(7) 個性(6) 特性(5) 発達(4) 家庭環境(3) 心情(2) 生活面・生活習慣(1)
	専門知識(N=72) 情報(N=2)
保育者の意識 (N=118)	経験(8) 経験(8) 時間(6) 時間(5) 多忙(1) ゆとり(23) 余裕(15) 焦らない(7) 自信(1) 勉強(13) スキルアップ(27) 自己研鑽(9) 事例検討(2) 研修参加(2) 記録(1) 受容(16) 心もち(13) 信頼関係(11) 偏見(5) 愛情・受容(54) 愛情(3) 共感(2) 丁寧さ(2) 振り返り(1) 子どもの理解者(1)
	協働 (N=19)
その他 (N=63)	その子(46) 不足(8) もっと(5) ～ねばならない(3) その保護者(1)

び合ったりすることができる場であり、保育士の期待は高いようであった。しかし、参加者に制限があったり、知識や技術を習得できる研修回数や時間が十分に確保できていなかったりなど、有効な活用ができるまでに至っていないようであった。

また、園外で開催されている支援研修に関しては、園内の支援研修同様に研修に対する期待は高いが、時間や回数の問題や、参加しても研修内容が難しかったり、実践につながりにくかったりするなどの問題もみられた。園外での研修に参加し、専門家からの教授だけでなく参加者との交流も有効であると捉えていたが、社会問題となっているように、保育士不足の状況の中で、保育者は多忙を極めており、研修への参加も困難であるのが現状であった。保育士の研修参加を支援する体制整備が必要であるようだ。

そのような現状の中でも、技術や知識の習得に合わせ、保育または支援の根底となる、子どもを受容することや、信頼関係を構築することも重要であると捉えており、保育士としての使命観と情熱をもち、子どものために奉仕する意識を抱いている保育士は多い。このように、個別の努力または勤務園独自の努力によって「気になる子ども」の保育や支援がなされている現状では、保育士に十分な心のゆとりが持たず、子どもへの丁寧なかかわりが行えないのが現状である。

保育士は、「気になる子ども」の保育または支援に困難さを抱きながらも、使命感と情熱で保育を遂行する日々の中では、木曾（2012）がいうように、健康を損ねたり、バーンアウトしたりすることも危惧されるような現状にもなりかねない。そのためにも、保育者への十分な支援が必要であるだろう。

本研究の結果では、園外で開催される研修への期待は高く、そこで専門技術や知識の習得を目指したいが、専門用語では理解しがたいため、研修会の参加者が交流し情報交換し、保育現場に合った即実践できるような内容の研修も期待されているようであった。

一般的な専門知識や技術も必要であるが、担当する子どもに有効な関わりができるように、いつでも気軽に相談できるような有効な取り組み方を検討し、保育

者の専門性の更なる向上を図ることができる方法が必要とされている。これらの現状を捉えた上で保育士が保育実践力や保育有能感の向上を行えるような、研修を利用しやすい制度や環境の整備、専門機関とのさらなる連携が重要であるだろう。

引用文献

- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子（2003）. 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査. 発達障害研究, 25, 50-61.
- 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子（2007）. 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究. 小児保健研究, 66, 815-820.
- 嘉数朝子・財部盛久・上地垂矢子・石橋由美（2007）. 保育者の「ちょっと気になる子」の認識と保育に関する研究（1）子ども観との関連で. 琉球大学教育学部紀要, 70, 25-35.
- 木曾陽子（2012）. 特別な支援が必要な子どもの保育における保育士の困り感の変容プロセス. 保育学研究, 50, 116-128.
- 厚生労働省（2017）. 保育所保育指針.
- 丸山美和子（2008）. 保育現場に生かす『気になる子ども』の保育・保護者支援. かもがわ出版.
- 無藤隆・柘植雅義・神長美津子・河村久（2005）. 『気になる子』の保育と就学支援, 幼児期におけるLD・ADHD・高機能自閉症等の指導. 東洋館出版社.
- 園山茂樹・由岐中佳代子（2000）. 保育所における障害児保育の実施状況と支援体制の検討-療育のある統合保育に向けての課題-. 日本社会福祉学, 41, 61-70.
- 竹田契一・里見恵子・西岡有香・秋元壽江（2013）. 保育における特別支援. 日本文化科学社.